

## 大会報告論文

# 博物館における自然地理学の役割

宮本真二\*

## I. はじめに

「地域博物館」の言葉に代表されるように、近年全国各地に博物館が建設されている。そして、その存在を支えてきた考古学、歴史学、民俗学などの人文科学系の分野では、博物館がかかえる問題が盛んに論じられてきた<sup>1)</sup>。ただ、その内容については、資格・研究条件など学芸員問題について扱ったものがほとんどであり、博物館活動の社会的・学問的役割については、明確に述べられてこなかった。

同様に、自然一人文現象を対象とする総合科学としての地理学においても博物館活動の問題について論じられることはほとんどなかった<sup>2)</sup>。自然科学的な側面をもつ自然地理学との関係においては、なおのこと、そのように思われる。しかし、「地域・場(フィールド)」を研究対象とする地理学は、その学問的性格からして地域社会とのつながりにおいて存在する博物館と密接な関係があるはずである。

そこで、本稿では筆者が専攻する自然地理学の博物館での社会的・学問的役割について、筆者自身が勤務する琵琶湖博物館の事例を交えながら述べていくことにする。

## II. 関係科学としての地理学

これまで指摘されてきた博物館における地理学の独自性や優位性とは、単に①地図を使える・読める、②空間的な思考など、地理学の表面的な特性に関係づけたものでしかない<sup>3)</sup>。これを、現実の展示に置き換えてみるならば、化石の産出地点、古環境変遷や遺跡分布の変遷などを、地図をつかって標本としての「モノ」とのつながりで説明している程度にしかすぎないのである。

だが、細分化された今の学問の諸分野において、地図を扱う(読む、描く)という行為や、空間的に思考するという研究プロセスは、フィールド・サイエンスでは共通しており、もはや地理学独自の特性とはいえない。

それでは、いったい地理学の「特性」というものを、博物館のなかでどう見い出してゆることができるのだろうか？

結論から言えば、この「特性」という問題を、筆者自身も自然地理学の立場から明確には見いだしていない。ただ、「関係性」というキーワードはそれを見いだしてゆく一つの手掛かりになるのではないかと考えている。

たとえば、門村は、博物館には触れていないが、環境科学研究における自然地理学の役

\* 滋賀県立琵琶湖博物館 研究部 地学研究室

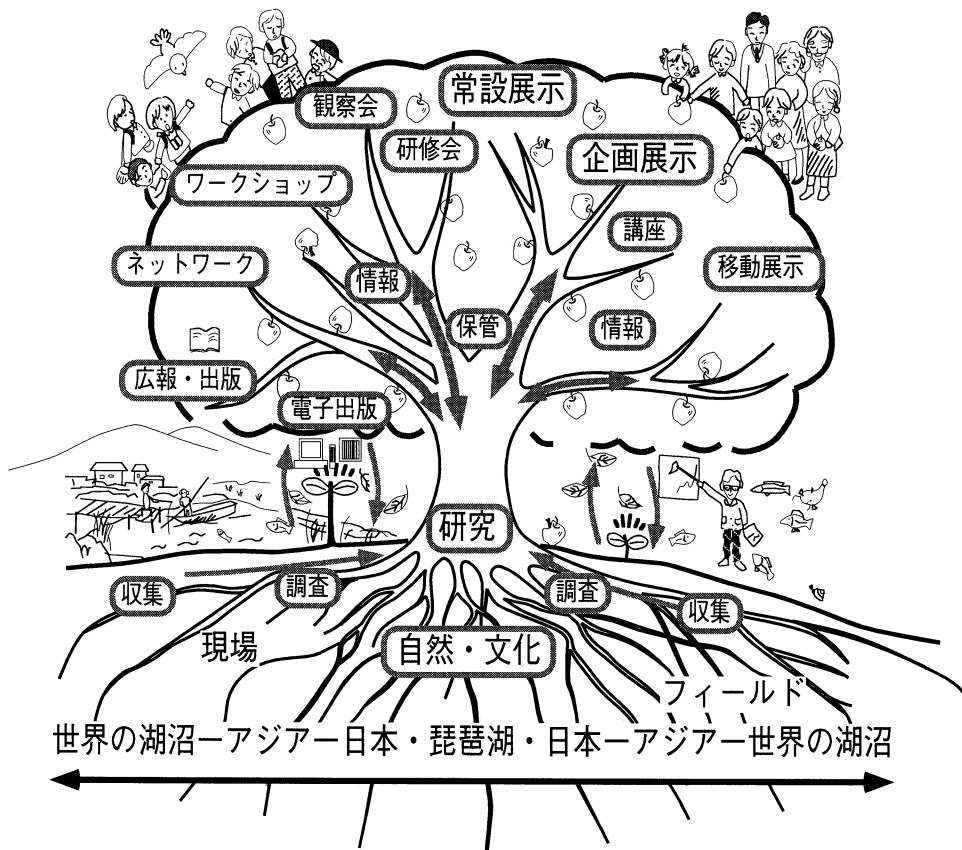
割を論じ、以下のように指摘している<sup>4)</sup>。「自然地理学の存在理由を地理学、とくに日本地理学会の枠内で議論しても、あまり生産的でないように思われる」。つまり、地理学を関係科学として捉え直す中から、自然地理学のアイデンティティを見いだすべきだと主張しているのである。

### Ⅲ. 博物館と“関係性”

1996年10月に開館した琵琶湖博物館は約10年間の準備室時代があり、初期の構想段階から学芸研究職員を採用し、学芸員自身が設立

に大きく関わってきた<sup>5)</sup>。琵琶湖博物館の基本理念は、「テーマ博物館」、「知的・情報集約型博物館」、「アミューズメント博物館」そして、「参加型博物館」である<sup>6)</sup>。そのテーマは、「湖と人間」、つまり“自然と人間の関係”の究明であり、目前にひろがる琵琶湖という共通項から、世界へとつながる、“関係する”活動を目指している。「地域博物館でありながら、地域博物館ではない」。そのような言い方が、琵琶湖博物館のありかたを、端的に、かつ分りやすく表現しているのかもしれない。

琵琶湖博物館では準備室時代から、調査・研究を博物館活動の柱であることを内外にア



第1図 琵琶湖博物館の活動イメージ

ピールしてきた(図1)。しかし、日本では「博物館の基本は研究である」という主張はあまり一般的ではない。つまり、「博物館活動=展示すること」として認識されているのである。これでは、地理学者にかぎらず、研究者の“とりつくシマ”<sup>7)</sup>がなくなる。著者は、「博物館らしい研究」、「博物館にしかできない研究」を見いだしてゆく前段階こそが、前にも述べた、「関係性」にあると考える。

#### Ⅳ. 自然地理学と博物館

##### (1) 研究の関連性

琵琶湖博物館では、自然と人間との関りあいをテーマとしていることから、自然系、社会系、人文系といった既存学問分野をこえた分野横断的研究が求められている<sup>8)</sup>。学芸研究スタッフの専門領域は多岐にわたり、国際公募をおこなった3名の外国籍スタッフを含め、30名以上が研究部に所属している。

研究の種類としては、個人的な研究テーマを発展させるための「専門研究」、少人数で、かつ近接領域で行う「共同研究」、学際領域を対象とする「総合研究」が設置されている。

そのなかで、今年度(1997年度)から発足予定の総合研究は、「水田生態系と人間活動に関する総合研究」、「琵琶湖の生物の生活史と生態に関する研究」、「琵琶湖と東アジアの湖、その成立と人間・生態系の比較研究」、そして「博物館資料の整理・保管と利用に関する研究」の4つが設定されている。

ところで、筆者自身、地学研究室に属しているのだが、この研究室では、古脊椎動物学、古植物学、火山灰編年学、微古生物学の領域を対象としている。そのなかで、筆者は花粉

化石をあつかう微古生物学の担当者であり、自然地理学の枠で採用されたわけではない。

筆者は地理学科出身だが、現在の地質学の研究室に属していても、以前からの研究テーマを大幅に変えることは現在のところない。また、博物館からもそのようなことを求められていない。さらに、先程述べた総合研究について言えば、著者は「琵琶湖と東アジアの湖、その成立と人間・生態系の比較研究」に、生態学や社会学専攻の学芸研究スタッフと共に参加している。しかし、このようなことは、近年自然科学系の研究者間で、各研究者のもつ手法によって共同研究が活発に行われようとしている現状からして、格別不思議なことではない。たとえば、牧田が地理学の特徴として「異種の研究分野のマネジメント」<sup>9)</sup>という指摘を行ったことにも、そのことが端的に示されている。また、安田の環境考古学<sup>10)</sup>や小泉の地生態学の方法論<sup>11)</sup>も関係性を重視しており、地理学が本来的に持つ総合性、総体性を再評価しようとしている。いずれも、自然地理学者からの主張である。

すなわち、関係性の学である自然地理学こそが、学際的な共同研究を行ううえで、各研究者間をコーディネートする重要な責務を担っているといえるのである。ましてや、分野横断的研究が求められる博物館の研究においては言うまでもない。

##### (2) 展示をどう評価するか？

調査・研究成果を学会発表し、そして専門誌で公表することは、研究者としての使命である。ただ、博物館では、その研究成果を学者間・研究者間だけで共有するのではなく、展示という情報発信媒体を通じて一般の人々にも共有してもらえる場をつくりあげていか

なくてはならない。

最近、大学や研究機関で業績評価を活発化する動きがでていいる。調査—研究—公表という大学などと共通の研究プロセスの上に、博物館では、これらの一連の成果を、最終的に展示という場で公表していかななくてはならない。

しかし、日本では展示を評価するようなシステムは、いまだ確立されていない。ただ、国立民族学博物館では「署名展示」を行い、研究業績として評価されるシステム構築が進められているようである<sup>12)</sup>。このような、システムが企画展示に限らず、常設展示にも一般化すれば、他の研究機関との共同研究もさらに活発化し、「博物館の基本は研究」である、という認識も広く一般化するのではないだろうか。そして、自然地理学を専攻する若手研究者の社会的評価や需要も大きくなっていくのではないだろうか。

## V. おわりに

博物館における自然地理学の社会的・学問的役割について筆者の私見を述べた。もちろんこの問題は、博物館関係者に限った問題でないことは明かである。地理学という関係科学としての立場を再評価するとともに、他の関連科学との活発な議論から、糸口は見いだせるものと考えられる。ただし、そのためには以下のような3点の検討課題があるだろう。

- ① 地域研究における具体的な方法論の検討
- ② 社会環境変化をみすえた将来展望のための積極的検討
- ③ 関連分野との積極的な意見交換

〔付記〕本稿は、1996年度立命館地理学会大会（1996年11月23日）において発表した内容に加筆・訂正したものである。発表する機会を与えていただいた吉越昭久氏（立命館大）と、本稿をまとめる過程で議論していただき、また、粗稿を読んでいただいた脇田健一氏（琵琶湖博物館；環境社会学）に厚くお礼申し上げます。

## 注

- 1) 例えば、歴史系博物館問題を扱ったものとして、以下の論考があげられる。  
倉田公裕「日本の博物館における学芸員の諸問題について」、歴史手帖20-11、1992、4～11頁。  
棚井清彦「学芸員問題の検討の推進」、歴史手帖20-11、1992、20～21頁。  
西垣晴次「博物館の役割と学芸員—日本学術会議合同ヒアリング—」、歴史手帖20-11、1992、17～19頁。  
また、自然史（誌）系博物館における問題について述べたものを以下に示す。  
青野陸治「博物館の地域調査と普及活動」、地球13、1991、708～713頁。  
糸魚川淳二「自然史学のこれからと博物館」、地球13、1991、688～693頁。  
糸魚川淳二『日本の自然史博物館』、東京大学出版会、1993、228頁。  
糸魚川淳二「日本の博物館—これまでとこれから—」、日本の科学者31-2、1996、5～9頁。  
糸魚川淳二「自然史博物館はいま」、(丹青研究所編『MUSEUM—講演録・明日の博物館を考える—』、丹青研究所、1996、所収) 34～74頁。  
大場達之「地域自然誌博物館の役割」、地球13、1991、697～702頁。  
竹内 健「日本の博物館の現状—自然系博物館を例に一」、地球13、1991、713～720頁。  
十菱駿武「地域活動と博物館」、日本の科学者31-2、1996、15～19頁。  
濱田隆士・館野聡子「博物館活動における新しい自然史志向」、地球13、1991、694～697頁。  
松岡敬二「博物館ネットワークの提唱」、地球13、1991、732～735頁。  
松岡敬二「学芸員の将来」、日本の科学者31-2、1996、10～14頁。
- 2) 橋本直子「博物館と地理学」、歴史手帖22-1、1994、13～17頁。
- 3) 例えば、額田雅裕「地域博物館・学芸員の現状と博物館活動の地理的分野」、立命館地理学8、1996、39～49頁。
- 4) 門村 浩「環境科学研究における自然地理学

- の役割」、地理学評論66A、1993、798～807頁。
- 5) 滋賀県立琵琶湖博物館『要覧』、滋賀県立琵琶湖博物館、1996、50頁。
- 6) 高橋啓一「地域に根ざし世界をみつめる博物館めざして—琵琶湖博物館の紹介—」、地学教育と科学運動24、1996、51～56頁。
- 7) 嘉田由紀子「琵琶湖は展示可能か?—琵琶湖博物館：開館直後の一学芸員のつぶやき—」、民博通信76、1997、24～35頁。
- 8) 前掲7)
- 9) 牧田 肇「生態学の視点を地理学はどうとらえるべきか?」、地理36-3、1991、26～32頁。
- 10) 小泉武栄「自然学としての地生態学—自然地理学の一つのあり方—」、地理学評論66A、1993、778～797頁。
- 11) 安田喜憲『日本文化の風土』朝倉書店、1992、211頁。  
安田喜憲「新たな科学の創造にむかって—環境考古学」、iichiko 33、1994、39～46頁。
- 12) 佐々木高明・石毛直道「博物館と冒険精神」、みんぱく5月号、1997、2～7頁。